

岡本 博文



普通赤ちゃんはいろいろな病気を経験し、免疫を獲得して成長していきます。しゃべらない赤ちゃんも、体の調子の悪い時、どんな点に気をつけたりよいか知っておきましょう。

1. 食欲、機嫌、顔色

など一般状態の良いときはあわてなくていいと思います。

2. 初めは微症状（微熱、不機嫌、食欲不振、せき、下痢など）でも、それがだんだん進行していくときは医療機関へ。

3. 微症状が長びき改善しないとき、発育に支障のある時は医療機関へ。

普段から赤ちゃんの顔つき、食欲、機嫌をよく観察して少しの変化にもすぐ気がつくようにしましょう。

赤ちゃんの救急

普段からよく観察する

赤ちゃんの発熱

赤ちゃんの体温は1日中一定ではなく、午前中は37度よりやや低めで、午後は37度よりやや高めです。ほかに症状がなければ、一般に脇下体温は37度3〜4分までは正常体温です。よく体温が高いと「肺炎になりはしないか」「ひきつけがおこるのではないか」と不安になって解熱剤を使用されませんが、元気がよくなって食欲もあり、機嫌もよければ解熱剤は使つべきではないと思います。もしどうしても解熱剤の座薬、内服薬を使う場合は、その間隔は6時間あけてください。

①赤ちゃんが生後3カ月未満での発熱②発熱の他に嘔吐、けいれんがある時③水分補給ができない時④顔色や機嫌が悪くあやしても笑わない時⑤うとうととして動きがよくない時。以上の時には救急で医療機関へ行ってください。

赤ちゃんの風邪

現在、風邪は9割以上がウイルスによる感染であると言われています。寝冷え、湯ざめなどによるものはほとんどありません。子どもは大体1年

間に5、6回は風邪にかかります。特に赤ちゃんは生後6カ月になるとお母さんからの免疫が少なくなつて風邪の罹患傾向も高くなります。家族からの感染も受けやすくなります。

そこで予防ですが、インフルエンザに対しては予防接種がありますが、ほかには積極的な対策はありません。昔から寒いと風邪をひくというので着ぶくれさせる親がいますが、風邪のウイルスは口、鼻、眼から入りますので厚着をしても効果はありません。

風邪をひいた人のせき、鼻水、くしゃみなどから感染します。予防は風邪をひいた人の近くには寄らないことです。大人の集会など、多くの人が集まるところへは行かないことです。

（岡本小児科医院院長）
 △お知らせ▽第262回応用教育心理学研究会は31日（水）午後7時から、倉吉市山根の倉吉シティホテルで。岡本博文氏が「子どもの救急医療」の演題で講演する。会費500円。参加自由。問い合わせは電話08558（36）4725、加藤さんへ（午後7時〜9時）。（月1回掲載）